

明珠

龍泉院
参禅会会報

35

平成13年12月8日

参禅会発足三十周年記念号



第二回在家得度式



北陸地方祖蹟参拝研修の旅



三十年の精進を祝して

龍泉院住職 椎名 宏 雄

「十年一昔」といいますが、まさに「三十年三日」の感がいたします。しかし、まぎれもない三十年の星霜は、会員の変遷を思い、諸行事の跡形や写真、当会報のバックナンバーなどを細くにつけても、ヒシヒシとした実感と懐かしい追憶が交錯します。

この三十年の星霜、ご精進を重ねてきた古今多数の参禅者各位に対し、ここに心からの祝意を表し、労苦をねぎらうものであります。昭和四十六年七月、龍泉院参禅会が創始されてから、本年の満三十年を迎えることができたのは、すべて会員各位あつてのことでした。

本年の記念行事も、また同じであります。会員各位の自発的な発露により、いずれも意義深い勝躑でありました。晩春に実施されたブレ行事というべき、玄奘三蔵の古跡を慕うシルクロードの旅、梅雨期の北陸地方祖蹟巡拝と参禅の行事、そして去る十一月三日の在家得度式、がそれでした。シルクロードこそ一〇余名の参加者でしたが、あとの両行事にはそれぞれ約三十名が参加し、盛会でした。

重要なのは、人数よりも内容です。祖蹟巡拝では、一泊兩日にわたり専門僧堂の雲水たちと起居行法を共にした

大野市宝慶寺での参籠は、のちに田中堂頭老師をして、この団体ほど真摯厳然と務めた例はない、との讃辞をいただいた点に、全ては尽くされています。在家得度式での感銘は、ご夫妻の方が五組もおられたことです。本来的に個人的な行である坐禅という宗教文化を勝縁として、真に仏法への親しみを共有しようとするご夫妻が増えてきた証左であります。これは、たとい当山の場合が偶然的であつても、在家仏教のあるべき理想のすがたとして、たいへんうれしいことであります。

また、二回目の得度者が九名もおられました。いうまでもなく、仏向上の道念であり、尊い菩薩行であることを疑いません。

総じて、本年の記念行事は上求菩提の色彩が濃いものでした。実は、それが三十周年の記念としては、誠にふさわしかったのであります。なぜでしょうか。

唐代の禅門でよく用いられた言葉に、「三十年來、馬騎を弄す、今日却つて驢馬に撲せらる」というのがあります。三十年もあらゆる馬をのりこなしてきたが、今日は何たること、小さな口バに蹴飛ばされてしまったとの意味で、

熟練した師家が思わぬ新参雲水の力量を讃える時の言葉です。

言うまでもなく、そこには熟練者本人の強い自己反省の念が籠められているのであります。三十年は熟練の歲月であると同時に、また無自覚的な惰性を誡める深い自己反省の機会なのです。したがって、本年の記念行事に上求菩提色が強かったのは、まさに正鵠を射たものであります。

今後また不測の一步一步、一期一会の相続であります。ご健康に留意せられて、ともに精進いたしたいと存じます。

合掌



動静大衆に一如す

松戸市 小畑 節朗

雨中拝登宝慶寺

蒼杉護刹自無言、槽滴穿階古佛門。
緩歩晨鐘宣止靜、山禽報曉啾啾繁。
焚香梵梵除塵業、兀坐如常燭影昏。
辨道身心隨大衆、溪声和雨響淵源。

雨中、宝慶寺に拝登す

蒼杉は刹を護つて自らは言無くも
槽滴 階を穿つ古佛の門。
緩歩すれば晨鐘 止靜を宣べ、
山禽曉を報て啾啾繁し。

香を焚て暮梵 塵業を除けば、
兀坐常の如くして燭影は昏し。
弁道は身心大衆に隨う、
溪声は雨に和して淵源に響かん。

梅雨の最中、宝慶寺での一泊参
禪は、誠に参禅会三〇周年記念行
事に相応しい一夜でありました。

制中で御修行の僧の方々には在
家が大勢押しかけて、弁道のリス
ムを狂わせ、ご迷惑をおかけして
しまったことでありましょう。そ
れにもかかわらず堂頭、田中真海
老師以下の心温まるご配慮に対し、
言葉もありません。

有難うございました。
御々しく拙詩を冒頭に掲げまし

たが、昔「傘松」誌上で読んだ
「弁道法の参究」が突然思い出さ
れ一律を賦してしまいました。

道元禪師が定められた「弁道法」
により如法に日々行持を行じて
おられる事に、一日でもその一端
に触れることが出来たからです。
聞いてはおりましても、実際に
行じられているのを目の当たりにし
て感銘また一入でありました。

その一は、緩歩です。
「応に身足同じく運ぶべし。面
前一尋許りの地を直観して行き、
歩量は跣に斉うす。緩緩として歩
し、閑静なるを妙とす」(弁道法)
実際にご指導いただき、ようやく
くその意味を知りました。僧堂内
はかく歩くものであると。
その二は、洗足です。
道元禪師入宋修行の参究録であ

る「宝慶記」に出ているではあり
ませんか。暁暗の中で両足を洗い
跣坐したことは実に新鮮でした。
イスラム教一日五時の礼拝には身
体の清浄を義務づけておりますが、
その中に洗足もあり、興味深いも
のがあります。

それにも増して、高祖道元禪師
の「弁道法」による行持が、日々
行じられている事実がなんとも尊
いことでもあります。

「道に在りて辨ず。道に非ずし
て辨ぜず。(中略)動静大衆に一如
し、死生叢林を離れず。群を抜
けて益なし。衆に違するは未だ儀
ならず。此れは是れ佛祖の皮肉骨髄
なり」(弁道法)のお示しです。

参禅会創設以来三〇年。
椎名老師のご指導のもと、弁道
などとは遥かに遠い坐禪を続けて

ドキュメンタリー・北陸地方祖蹟参拝研修の旅

感動裡に円成す!

今年、龍泉院参禅会が誕生し
て、三〇周年の節目の年。その記
念行事の一つとして、去る六月二
九日から七月一日までの三日間、
曹洞宗の故郷ともいべき福井・
金沢・能登エリアを巡る「北陸地
方祖蹟参拝研修」の旅に行つて参

りました。
椎名ご老師を団長として、小畑
代表幹事さん、安本・五十嵐年番
幹事さんに導かれ、総勢二九名の
参拝研修旅行となりました。
以下は、研修旅行の行程に添い
ながらの記録です。諸般の事情で



小畑氏(左)天徳院で

参りましたが、釈尊、道元禪師と
代々受け継がれてきた「坐禪」を
中心とした和合衆からなる参禅会
の継続も誠に尊いことでもあります。
仰ぎ見るものは、理念でも到達
目標でもありません。佛祖の道現
成の「坐禪」であります。

ひとりではなく、皆で坐り続けて
以後幾十年、いや幾百年の相続を
信じ、三〇年目を元年として出発
いたしたく存じます。 合掌

注：弁道(辨道)は道業成辨の意と
一般的にいわれる。広辞苑には一言
「佛道を修行すること」とあります。

「明珠」編集委員・杉浦上太郎

参加が叶わなかった会員さんにも
いささかなりとも、雰囲気を味わ
っていただけましたら幸いです。

◆六月二十九日/午前九時、羽田空
港に無事全員集合。八〇歳代の佐
藤初恵さん、七〇歳代の高野千代
子さんも元気な姿でご参加。

・九時五〇分、小松行きの高松をときめかせる旅が始まった。
 ・一〇時五〇分、予定通り小松空港に着。空港には、三日間私達の足となってくれる北陸交通の観光バスがすでに待機。運転手の楠作健二さんが笑顔で出迎えてくれる。
 車内で早速、五十嵐年番幹事さんから全行程のガイダンスが綿密に行われる。

次いで、椎名ご老師よりご挨拶を賜る。「三日間の研修旅行ということで、さぞやりくりされるご苦労があったことでしょう。しかし二九名がこぞって遠路の研修旅行に参加されたことは大変素晴らしいことと思います。今回は北陸の古刹七カ寺を全部回るということで、幹事さんの努力は大変なものでした。坐禅は五柱ありますが、コンディションの悪い方は決して無理をしないで結構です。大変な中にも楽しく過ごし、元気で帰りますように。」

次に小畑代表幹事さん。「安本、五十嵐両幹事さんが苦勞して今回の企画が実現できたことに謝辞を申し上げます」と。更に当日から翌日にかけての宝慶寺様での「参禅差定」のガイダンス。小畑さんは、すでに宝慶寺様を訪問され、同寺の田中ご老師とご面談の上、

決定されたとの由。僧堂内では緩歩で歩くこと、私語厳禁の注意事項も承る。

・一二時四〇分、大野市内の「福そば」で昼食。四種類のそばと山菜ごはん。大野名物の里芋も。腹ごしらえの後、坐禅の身支度。心も整え、緊張感も高まる。

・一二時三〇分、一路宝慶寺へ。宝慶寺川沿いの細い山道を縫うように進み、バスが行けるのは宝慶寺橋を渡った駐車場まで。後は徒歩で約一五分間急坂を登って総門に辿り着く。突然眼前に、四角形に切り取られた空間が出現。古色溢れる山門、法堂、庫裡があなたかく出迎えてくれる。

・二四時、**薦福山宝慶寺**様に上山。早速ご本尊様に三拝の礼。田中真海ご老師とも三拝の礼。最後の三拝日は、田中ご老師より先に賜り、私達も返礼の三拝目を。「坐禅をする人には、無条件で私から先に拝をさせていただく」との田中ご老師のお言葉に胸が熱くなった。

続いて田中ご老師より、歓迎のお言葉と同寺の来歴の紹介を賜る。「薦福山の命名の由来は、開祖寂円禪師の故郷が洛陽の薦福という地名から。宝慶寺は、宝慶年間の建立に因む。道元禪師様が二四歳で中国に渡られ、如浄禪師様に

師事、二八歳で帰国。その翌年、七歳年下の寂円様が中国から道元様を慕って日本に渡来。寂円様は、以来道元様に、宇治興聖寺から、永平寺までの二七年間仕え続けられた。

道元様亡き後は、この銀杏峰の麓に來、広さ畳一畳分、高さ一〇メートルの坐禅殿の上で端坐。一八年間悟後の修行を続けられた。

一二六一年、土地の守護伊地良氏が寂円様のお姿に感銘を受け、宝慶寺を建立する。寂円様七〇歳のとき義雲禪師様が師事。以来、寂円様は一八年間義雲様を育てられ九三歳でこの地に示寂される。冬、雪は法堂の鴨居の高さまで積もる。積雪量は永平寺の二倍。また、宝慶寺の住職が、五代も永平寺の住職になっている。

今、一七人の雲水（アメリカ人女性を含む）が、修行している。一日六柱坐っている。また永平寺から独立して二年半たつ」と。

法堂の一角には、すでに講義用の机が準備されていて、そこでお茶のご接待を賜る。ほどよく冷えた香り高いお茶をいただきながら宝慶寺様のご配慮をありがたく思う。長旅の疲れがフ

ツと消えた。

・一四時三〇分、一五時三〇分まで、椎名ご老師の講義「日本曹洞禅の源流」を拝聴。資料「曹洞宗法系譜」を賜ったの受講となる。

「道元様は一二四四年、四五歳のとき永平寺に入山され、一〇年間修行。永平寺の名は、道元様が中国へ仏法東漸の年号をもって名付けられた。永平一〇年は後漢の時代、明帝が皇帝についた年。道元様の後を継いだ懷祥様は、道元様より二歳年上。当初、日本達磨宗であったが、道元様に師事。後に『随聞記』『永平広録』一〇巻を編す。懷祥様の後継者である義介様も日本達磨宗の人であった。

ここ宝慶寺様の開祖寂円様は洛陽出身。道元様を慕って日本に渡られた。永平寺におられた頃は、如浄禪師様の廟である承陽庵の塔主をお勤めされていた。





洗足を如法に

大乘寺二世の瑩山禪師様は、「坐禪用心記」「瑩山清規」を著わされた。清規はお寺のきまり(ルール)である。瑞龍寺様式建築といわれる建築美を誇る瑞龍寺。一方、瑩山様の清規に徹する禪風の大乗寺を対比して、伽藍瑞龍、規矩大乗といわれている。講義の予定時間は二時間だったが、到着の遅れから残念ながら一時間で終了。いよいよ宝慶寺様での最初の坐禪「嘯時坐禪」となる。坐禪の前に、緩歩と洗足の作法を学ぶ。全堂内とくに僧堂内においては、決して早足で歩いてはならない。一息一步の緩歩で、ちょうど経行の倍の歩幅で歩むことになる。

洗足は、僧堂の裏手にある専用の洗足場で行ずるのだ。偈文を唱えてから、椅子に腰掛け、杓子で静かに足首から水を掛ける。清水がサラサラ流れる洗足場は、野趣溢れる清浄域。身も心も洗われる。

僧堂では、内単組と外単組に分かれる。椎名ご老師の他、小畑代表幹事さん、中嶋さん、安本さん、添田さん、杉浦の五名が内単に、その他の方々は外単にて坐る。最初の一炷は、緊張の内に過ぎた。

- ・一六時二〇分、晩課。甘露門、修証義、大悲呪などを読誦。
- ・一七時、薬石。山菜おこわ、おろしそば、味噌汁。すべて美味。ここにも宝慶寺様のお心が伝わる。
- 薬石後、宝物殿にて寺宝を拝観。有名な「道元禪師観月画像」、道元様の真筆の賛が書かれている。椎名ご老師の解説によると、右日は上を左目は下をお向きとのこと。遍く見渡す慈眼ということであろうか。その他「如淨禪師画像」「雲居禪師画像」「釈迦三尊像」などが圧巻。同寺の雲水様の解説を聞きながら、ありがたく拝観を終える。作務の予定は、宝慶寺様のご配慮で取り止めとなった。

また、宝慶寺様のご好意で、大変立派な冊子「修行の寺宝慶寺」を希望者全員に賜る。有難し。

- ・一八時五〇分、夜坐。間に経行を挟み二炷の坐禪。水音がさらに静けさを深くする山奥での坐禪。そこに存在していることだけで、自然と一体となる。
- ・二〇時五〇分、放禪となり、今

日一日の予定がすべて終了した。法堂の右側に女性、左側に男性が布団をそれぞれ二列に並べる。

- ・二二時三〇分、開沈(就寝)。時間の観念が一変する。宝慶寺様時間では、もう深夜なのだ。山も人も堂宇も、ともに眠る。

◆六月三〇日／三時三〇分、起床。

殆ど全員が振鈴前に起床。振鈴は木版だ。早速、寝具の片付け、洗面、洗足とすべてが肅々と進む。そして緩歩にて僧堂へ。外は雨。

- ・四時一〇分、暁天坐禪。田中ご老師よりご提唱。「鳥の鳴き声が聞こえる。自





宝慶寺の僧堂で坐禅

然と一体となり自然に對して真つ直ぐな心をもつ。正しい坐禅の要諦は、足の組み方、背筋の伸ばし方、頭・顎の位置、目の向き、息遣い、法界定印の形、すべてに工夫が必要である」と。

やがて、全員に警策が与えられる。コツツ、ピシツ、コツツ、ピシツと静けさの中にリズムカルな乾いた音が響く。コツツは、警策を与える人の畳を軽く打つ音、打つ合図。ピシツは、肩を打つ励ましの音。かなりズシツとくる。後で多くの方が、今まで体験したことのない痛さだったと感想を述べていた。さすが全国でも数少ない永平清規に則つての修行道場だ。やがて太鼓、鐘、雲版、木版の

絶妙なハーモニーとともに大開靜の時を迎えた。

・五時三〇分、朝課。田中ご老師を導師として、全修行僧の方々によつて肅々と厳修される中に、私達も溶け込んだ。

再び緩歩で僧堂へ向う。小食をいただくのだ。応量器を捧げもつて自分の単に向う。壁を背にして坐る。展鉢の作法はどうだったか、戸惑いの顔になる。しかし、要所の単に雲水様が入替われ、親切に指導をしてくださる。遠くに庫裏の雲版が莊重に響く、堂内の魚鼓も打たれる。やがて淨人様が、淨巾をもつて現れ、淨縁を拭き清めてくださる。応量器を捧げもつて「展鉢之偈」をお唱えする。応量器を包んである袱紗を解き展鉢していく。一切は、厳肅に作法どおり淀みなく進行していく。隣りの雲水様の作法を見れば見真似で何とか袱紗を閉じることができた。玄米の粥。大豆入りの粥だった。香ばしくてとても美味しい。いつまでもその味と、宝慶寺様のありがたにお心遣いを反芻していた。

・六時二〇分、法堂裏手に祀られる開山堂を拝観。寂円禪師様、義雲禪師様、曇希禪師様を祀る。何と北条時宗公の父である北条時頼公のお位牌も祀られていた。その

由来は不明とのこと。

安本さんは、田中ご老師と数年前にお会いして以来の再会を、かく申す私も二年前お世話になった真源様との再会ができ、共々感激。大勢での一泊参禅は、宝慶寺様には修行のさまたげになったに違いない。それにもかかわらず、すべてのことに、きめ細やかなご配慮を賜った。只管深謝あるのみ。

・八時五〇分、千載一遇の坐禅をさせていただいた宝慶寺様を辞する時が来た。田中老師が私達全員を見送ってくくださった。山の雨は慈雨。草木の歓喜の声を聞きながら下山する。

・一〇時、雨降りしきる中、私達の大本山である永平寺様に到着。道元様が中国から帰られて二〇年後の四四歳のとき、参禅道場として建立された。約一〇万坪の溪声山色豊かな幽境の地に、堂々たる七堂伽藍を中心として大小七〇余棟が立ち並ぶ。

この聖地は、かつて椎名ご老師が修行された道場。私達の原点だ。椎名ご老師のご案内で傘松閣、僧堂、仏殿、法堂、承陽殿を巡る。承陽殿は、道元禪師様の御真像、御靈骨が奉安されている。また二祖孤雲懷辨禪師様、三世徹通義介禪師様、四世義演禪師様、五世義

雲禪師様そして太祖登山禪師様の御尊像も祀られている。時なく三〇分余で、永平寺様を辞する。

出発直後、椎名ご老師より傘松閣の天井絵の絵葉書を頂戴する。申し訳なく思いつつ感謝して頂く。

・一一時三〇分、金沢西レストハウスで昼食。甘海老、もずく、素麺、瓦焼きのメニュー。

・一二時五五分、金獅峰大乘寺様に到着。

山門前で、世界を忙しく駆け巡られる今泉章利さんと笑顔の合流。

大乘寺様は、当参禅会発足二五周年記念の一行事「公開講演会・禅を聞く会」の講師を、奈良康明先生とともに勤めくださったあの板橋興宗老師（現鶴見總持寺貫首様）の活躍された修行道場だ。

イギリス人の透徹様のご案内に少し驚いた。修行されてまだ二年との由。本寺は一二六一年、当初真言宗として建立。それから三八年後、徹通義介禪師様を迎え、曹洞宗第二の本山となった。発菩提心を重んじ、出家、在家を問わず広く門戸を開けているのが特長。

二六名の雲水様が修行中とのこと。茶葉のご接待を賜わり、いよいよ僧堂での坐禅開始。有難くも内単を使用させていただく。しかし単の高さに少し戸惑う。八〇cmは

あろうか。後ろ向きになって少し飛び上がらないと坐れない。

歴史ある修行道場では、その空気に染まるにつれ、道心が高まってくる。今回最後の坐禅となるこの一柱に、皆すべてをかけた。透徹様の警策は、慈愛に満ちた音だ。

坐禅の後、開山堂、仏殿を拝観。開山堂には、道元禅師様、懷辨禅師様、徹通義介禅師様のご霊骨が奉安されている。二時間で辞する。

・一五時、金龍山天徳院様着。

永平寺様と總持寺様の両寺を本山とする珍しい寺院。一六二三年に前田利常公が正室珠姫（徳川秀忠の次女）の菩提を弔うために建立。翌年、巨山泉滴和尚を千葉県鴨川の長安寺より迎え、第一世開山とした。珠姫は三歳のとき徳川家から輿入れし、一四歳で結婚。三男五女を生み立派に育成した。

また珠姫は前田、徳川両家の融和に心を尽くした。しかし二四歳の若さで逝去。天徳院の由来は、珠姫の戒名「天徳院殿乾運淳貞大禅定尼」に因む。日本女性の鑑として、いまだに広く敬愛されている。どこことなく華やきを感じのお寺だ。四〇分間の拝観で辞する。

・一七時、洞谷山永光寺（ようこうじ）様着。

永光寺様は、一三二三年、笠山

禅師様が四五歳のとき創建された曹洞宗の古刹である。

ご住職は寺宇修復の浄財を募って、全国行脚中でお留守。檀家の役員と思われる方が、熱弁を振って説明をしてくださった。同寺は北陸の正倉院と称されるほど多くの仏像、文書が存在していて、将来は博物館を建設したいとの由。

かつて山岡鉄舟が寄付金の替えとして自身の書六千枚を寄贈したとのこと。襖に書かれたダイナミックな墨痕は、まさに男の字だ。堂宇拝観。まず法堂の裏手にあってその屋根を見下ろす伝燈院。如浄・道元・懷辨・徹通・瑩山禅師様の五大祖師を奉祀している。

正月、大本山總持寺祖院で瑩山禅師様にお供えされる、白山水の滴りを拝見しながら、さらに登る。瑩山禅師様の御墓、開山塔を参拝。椎名ご老師が舍利礼文をお唱えされた。その上の地に、宗門唯一の霊場五老峯がある。如浄様の語録、道元様の霊骨、懷辨様の血経、徹通様の嗣書、そして瑩山様の嗣書が安置されている。それらしい建物は一切なく、石柵の向うに、一見土饅頭と思われる盛り土の下深くに、宗門最大の宝物が奉安されているのだ。皆、驚きとともにし

はし感慨深い思いに浸る。

お茶とお菓子の接待を頂戴し、一八時二五分永光寺様を辞する。

・一九時一〇分、本日の宿泊所「いこいの村能登半島」に到着。名称のイメージとは違って、ホテルのような近代的で広い建物だ。早速温泉に浸かる。わずかに残る足の疼きが、湯に溶けていく。

・一九時四〇分、儼然ながら杉浦の乾杯の音頭で夕餉の始まり。即、笑顔と談笑の渦だ。ビール、冷酒の壺が、猛烈な勢いで空になっていく。この瞬間は、まさに在家修行者の大開静の時だ。（椎名ご老師ごめんなさい）魚の名所らしい新鮮な料理にも満たされた。

高野さんのご意見「折角北陸へ行くのに二泊ともお寺では……。一泊は温泉に入りたいわ」に、椎名ご老師がご理解くださった上で、役員の方々が見事に応えてくださったおかげだ。数名の方々は、すっかり元気を取り戻し、部屋に戻ってからも、さらに盛り上がったらしい（誰でしょう？）。

◆七月一日／七時三〇分、朝食。八時三〇分、いこいの村出発。鉛色の外海を左車窓に見て走る。途中能登金剛の奇岩を見物。

・九時三〇分、曹洞宗の大本山、諸嶽山總持寺祖院様到着。

總持寺様は、一三二一年、瑩山禅師様によって開創された。明治三年の大火災によって七堂伽藍の大部分を失った。これを機に布教伝導の中心は、神奈川県鶴見の總持寺に移った。しかし、その後次々に堂宇が再建され、山水古木と調和しつつ、一大聖地、修行道場として現在に至っている。

案内の方に導かれて堂宇拝観。まずは仏殿。一角に掛けてある大しゅもじと大すりこぎは、御仏の慈悲の象徴だ。仏殿隣りの客殿では、折りよく秘仏展開催中。僧形観世音菩薩像を拝見する僥倖に恵まれた。夢枕観音とも呼ばれ、普段は観音堂に安置されていて拝見することはできない。約八〇年



五老峰の山々にこだまする誦経の声



威様を誇る總持寺祖院の山門

前の平安時代の作。次いで法堂、瑩山禪師様の御霊を祀る御廟を巡る。選佛場（僧堂）も拝観した。雲水様とはお会いできなかったが、今二〇数名の雲水様が六八〇年の伝統の中で修行中との由。
 ・一〇時三〇分、總持寺様出立。バスは一転して、富山湾側を走る。七尾を経て、氷見へと走る。外海側はどんより曇っていたが、こちら側はすっかり晴れ渡り、海も風、遠く富山湾の向うには、雲の上から、立山連峰の頂きが、その頭を覗かせている。バスも快走、気分爽快だ。
 ・一二時三〇分、氷見漁港着。富山湾は全国有数の魚の宝庫。富山湾漁業の玄関口は氷見漁港だ。

昼食は、その漁港近くの魚料理専門店「ひみ浜」。鯛・鱒・わらさ（鯛の幼少名）の焼き魚（各自どれか一品があたる）。甘えび、はまち、鯛などの刺身とあら汁。どれもが美味しい。店主は、大宮出身で商売熱心な人。食後は、近くの湊川栄橋下で、鳶・鷗への餌付けを見せてくれた。
 ・一四時一五分、最後の訪問先、高岡山瑞龍寺様着。
 同寺は加賀二代藩主前田利長公の菩提寺で、約三五〇年前（江戸時代）の建立。国宝の山門、仏殿、法堂。総門、僧堂、大庫裏、回廊、大茶堂は国の重要文化財だ。堂宇はすべて美しく、しかも広大な敷地にゆったりと配置されている。堂宇の間には一切の配置物がなく、緑鮮やかな芝生があるのみ。
 七堂伽藍のほか石廟を拝観。前田利長・利家、織田信長、同室玉泉院の母堂、織田信忠の分骨が奉安されている。
 時の政争を感じさせられたのは法堂の屋根が、何と鉛葺き。有事の際は、鉄砲玉に耐えるとのこと。
 ・一四時五〇分、こうこう最後の古刹拝観を終えた。
 夢のような曹洞宗祖蹟参拝の旅も大詰め。帰路は富山空港から瑞龍寺様から空港へ向う車内に

て、感激覚めやらぬ参加者の声を集めさせて頂いた。なお以下の文中にお四方と表現した箇所は権名ご老師、小畑代表幹事さん、安本・五十嵐年番幹事さんのこと。
 松井 隆さん 富山県小矢部出身なので、今回の旅は感激だった。空も晴れ渡りこれも感激。二日間の坐禅はしつかり坐ったつもり。
 遠藤 剛さん 二泊三日の多様なスケジュールは、中身が濃く満喫した。お四方にお礼申し上げます。
 中島宏誠さん 立派な企画に参加させていただきありがたかった。一人ではとても来られない。
 寺田健二さん 宝慶寺の坐禅が印象的だった。
 美川武弘さん 宝慶寺の坐禅は、龍泉院と様式が違いとまった。しかし雨の中の坐禅は、とても充実していた。
 添田昌弘さん 北陸の田舎あるお寺を初めて回った。宝慶寺の坐禅は昔しか、たが、響きがかかった。こ思う。

二階堂雄一さん 三〇周年記念の北陸二泊三日参禅会に参加できてよかった。二日目の坐禅は、足が折れるかと思った。個人的にまた来てみたいと思っている。
 今泉章利さん 途中から遅れて参加。大乗寺は雨が降っていて印象的だった。皆さんに会えたとき家族に会えたように嬉しかった。
 久光守之さん お四方に感謝。最近勤が当る。今回の坐禅は辛い勤が働いた。一柱目は今迄で最も辛かった。翌朝の坐禅はよかった。
 石田七重さん 宝慶寺は車の音がなくて水の音が常にあつた。田中ご老師の「鳥のさえずりと共に夜が明けると」がよかった。カラスがいない別世界はとてもよい。
 牧野洋子さん 今回は本当に足の痛みがきつかった。二日目の坐禅のとき、小鳥の声を聞いているうちはよかったが、少したつとまた痛みが。痛みに耐える坐禅、これも修行かと考えてしまった。
 加藤和子さん 初めての宿泊坐禅会、中身が濃く満喫した。ここに至るまでのご努力に対し、お四方にお礼を申し上げます。
 美川恒子さん お世話様。大乗寺での坐禅は、眠くて警策を頂くがとてはやさしくて目がさめなかつた。もう一度欲しかった。

三町 勳さん 今回の二泊三日の旅、幹事さんの努力でよかった。北陸の寺が立派で、日本文化は素晴らしいと思った。常日頃合理性を追求しているが、不合理性の中に真実を見つかる。修行は自分の道を探す大切さを教えてくれる。

阿部史子さん 一年前に続いて、二回目の参加。三〇周年記念の二泊三日参禅会に参加でき、とても恵まれている。お四方に感謝。

大坂昌子さん お四方に感謝。貴重な体験をさせていただいた。

永野昭治さん 宿泊付きの参禅会で、昨晚諸先輩の方々の体験談を聞くチャンスを得た。今後の生き方の指針となった。

室橋 旭さん 宝慶寺の田中老師の「水中に樹林あり」が印象的だった。今回参加させていただいて感謝。石川県は父方母方の故郷、改めてよい所と思った。

宮本 茂さん 宝慶寺での坐禅は内単と外単に別れて坐った。私は外単だった。内単と外単では、厳しさに差があると聞いたが、実際はどうだったのかを知りたい。

高野千代子さん たくさんのお寺を拝見して改めて日本の文化の素晴らしさを感じた。出される食事の何ともいえない心配り。宝慶寺様のお粥と、その中に入っていた

お豆に慈しみを感じた。椎名老師様、小畑代表様の心遣いに感謝。

今泉房子さん 学生時代の夏休みに二〇日間、学割で永平寺など北陸を回った。当時はこのような便の悪い所には二度と来まいと思つた。三二年振りに来られてよかった。道元様に少し近づけた思い。

佐藤初恵さん ばばです。今泉房子さんに大変面倒をかけた。皆様にもとても感謝している。

杉浦上太郎 夜だけ元気と思われているかも知れないが、坐禅もしているつもり(うそ)。宝慶寺では、二年前に、お世話になった雲水の真源様に会えて感動した。

代表幹事/小畑節朗さん 高野さんのご意見で、このような企画になった。ご高齢のお二方のご参加で、当初は大丈夫かと心配したが、無事終わってよかった。今はもう一炷坐りたい心境。

年番幹事/安本小太郎さん 無事でなにより。今回の会費はピツタリ足りたと思う。宝慶寺さんの僧侶の方々は、気を使ってくれた。

年番幹事/五十嵐嗣郎さん (ちやうど、富山空港に到着。残念ながらお話しはなし)。

・十五時、富山空港着。三日間、私達の足となってくださった北陸交通の桶作さんに、大変お世話になつた。桶作さんは寡黙ではあるが、何か問うとにこやかに応えてくれる好青年。三日間の走行距離は、六〇〇kmにもなった。仕事とはいへ大変なこと。皆で感謝した。

空港出発ロビーで、椎名ご老師よりご挨拶をいただいた。

「龍泉院参禅会三〇周年記念行事」として、多くの方々と曹洞宗ゆかりの七カ寺を無事参拝することができてなにより。これも小畑代表幹事さん、五十嵐年番幹事さんが綿密な計画を立ててくださったこと、安本年番幹事さんが会計役で支えてくれたこと、またそれにも増して参加者全員の衆力相合によって円成となった」と結ばれた。

また五十嵐さんの企画をサポートしてくださった同氏ご友人の西野邦明さん(瑞龍寺様から)同行に、全員でお礼を申し上げる。

・一六時一〇分、富山空港離陸。

・一七時一五分、羽田空港に着陸し、無事、笑顔での散会となった。

以上で二泊三日の「北陸地方祖蹟参拝研修旅行」の終了です。

今回の研修旅行の印象は、参拝、坐禅、食事、宿泊などすべての箇所が事前に吟味され、スムーズに進行し、大変な充実感があつたという事です。全参加者が満足されたことでありましょう。

そのおかげさまは、まず、椎名ご老師より、きめ細やかなご指導と多々ご配慮を賜ったことが、今回の企画実現の基となりました。

また、何度も宝慶寺様に足を運ばれ、綿密な準備に腐心された小畑代表幹事さん。そして五十嵐年番幹事さんの卓抜した情報収集力と企画力。面倒な会計を緻密に支えられた安本年番幹事さんのご努力が、がちりかみ合つて円成したのだと思います。

その他に宝慶寺様の田中ご老師と雲水様方、大乗寺様の透蔵様、



北陸交通の桶作さん、五十嵐さんご友人の西野さん等、多くの方々から沢山のご恩をいただいたことを、決して忘れてはならないでしょう。ここに改めて、すべての方々に厚くお礼申し上げます。

今回の旅が、私達の坐禅修行の大きな節目となってくれることを祈ってやみません。 合掌

雨音を聞いて

坐った宝慶寺

千葉市 寺田 哲朗

椎名老師から禅の承講のお話しがあり、時間を超えて今私達のいる場所が、その中にありました。そこで坐れば、ひたすら雨の音。翌日の暁天は田中老師の一声。「何回も失敗した後、ある日ふと補助輪なしで自転車にのれた時の快感を思い出せ。坐禅にもそれはある」

私はこの「何回も失敗して」というところに元氣付けられ、時間を忘れた頃、大太鼓と大中小の鐘の合奏に迎えられました。この音色は久しく最初の頃の迦葉山一泊参禅会を蘇らせてくれました。街に戻り、時がたって消えない内にまた聴きたい、と思いつつ終わりになりました。帰りに田中老師が

一人一人に挨拶をされたのも、忘れ得ぬ体験でした。

今回もこの行事を企画していただいた老師様、幹事様に本当に感謝申し上げます。

宝慶寺と總持寺祖院

流山市 中島 宏誠

参禅会三〇周年記念行事の一つ「北陸祖蹟参拝研修」に参加することができ、感謝しております。

七カ寺参拝の中で特に印象に残った宝慶寺では、坐禅堂内単に坐らせて頂き、貴重な体験をした。

坐禅をする前、内単と外単を、背中を屈め、腰を低くし、合掌しながら堂内を一周した。このような行いは、初めての経験であった。



法堂に着く。寝起きもここで

坐禅では、田中眞海堂頭の脳天から足の指先まで痺れを感じた、強烈な警策をいただいた。今まで受けた中で、最大級の警策であった。總持寺祖院では、椎名老師に僧堂の前で写真を撮って戴いた。この写真は、私の本研修旅行の貴重な記録である。

終わりに、本研修旅行を企画・立案くださいました椎名老師、小畑代表、五十嵐・安本両幹事に改めてお礼申し上げます。 合掌

宝慶寺での参禅

沼南町 添田 昌弘

私は今年六月で六五才になりました。たまたま今回、龍泉院参禅会三〇周年記念行事の一環として、宝慶寺での一泊参禅に参加するに当たり、道元禪師の『宝慶記』を開いてみた。

如浄禪師が六五才の時のお言葉を見つけた。私は時々、坐禅に向いていないのではないかと、思うときがある。その私が如浄禪師と同じ年齢で、天と地の開きがあるのは分かってはいるが、何となく興味を湧いた。

如浄禪師は「仏法を聞き、仏法を思うことは、門の外にいるようなものであるが、坐禅をすること

は、真つすぐ家に入り、くつろいで坐っているようなものである、と釈尊は言われます。このように坐禅は、たとえわずか一瞬の坐禅でも、その功德ははかりしれないものがあります。私は三〇余年の間、いつも坐禅の修行を続け、これまで一度も、坐禅をやめようと思つたことなどありません。今年で六五才になりますが、老いてますます、その思いは固いものがあります。このようにあなたも仏道修行に功夫をつまれるなら、それこそ仏祖直伝の教えにかなうものといえましょう。」

私は脚を組んでもなかなかスツと坐禅に入れない。脚を組んだとたん、脚がつつてしまつたり、脚が痛くて坐禅どころでなくなつてしまふ。雑念は年中で、また睡魔もときどき襲ってくる。最近は開き直つて気にせず坐っているが、以前は悲しくなつた。腰に錘を立てて坐るなどということも何かの本で読んだが、そんなことは出来そうもない。

吉田兼好の『徒然草』に「或人、法然上人に、念仏の時睡におかされて行を怠り侍る事、いかがしてこの障りを止め侍らん、と申しければ、目の醒めたらんほど、念仏し給え、と答へられたりける、い

と尊かりけり」とあった。他力門と自力門とは同格に論じることには出来ないかもしれないが、出来の悪い者にはこれも許してもらえないのではない。

雲水の厳しい修行道場として有名な宝慶寺での一泊参禅は、そんな私にも意味のあるものとなった。道元禪師が二四才で入宋したのは、宋の年号で宝慶元年だった。道元禪師が「宝慶」という文字に特に感慨をこめて記しているのは意味のあることであろう。

その宝慶寺で参禅した。あらためて緊張した空気を味わった。私は悪戦苦闘しながら坐禅を続けているが、一度もやめようと思つたことはない。これからも悪戦苦闘が続くのだから、参禅会のすばらしい仲間の一番後ろを歩いていく積もりである。今回の研修旅行は続けるための一つの契機となった。一緒に参禅させて頂いた椎名老師始め幹事の方々、そして仲間感謝する次第である。

「北陸路、仏道修行」

柏市 宮本 茂

参禅会三〇周年記念行事の一環としての「祖蹟参拝研修の旅」は、大変充実した二泊三日でした。初

日は羽田空港から小松空港経由で福井県大野市の宝慶寺へ。街道沿いの水の流れ、水の清らかさに魅せられた。大野市が小京都といわれるのも納得する。

今回の祖蹟巡拝の最初の地、宝慶寺では出されたお茶が何ともいえないほどおいしかった。

お寺の隅々まで専門道場という雰囲気を感じた。また特に足を洗ってから参禅するという修行は新鮮に感じられた。坐禅堂での緩歩、入堂、坐禅、朝課は緊張が持続でき、日頃の坐禅とは少し違った。本堂での就寝は、かなり昔の修学旅行に味わった時と同じよ



冷茶のとろけるような、おいしさ！

うな気持でまた一味違った体験でした。

二日目に、午前二時三〇分起床、洗足。暁天坐禅で警策を頂いたが少しも痛みを感じないのが不思議であった。根本道場での本格坐禅を体験できた事は本当に有難かった。下山する時、あいにくの雨であったが、バスまで見送りに来て下さり、大変恐縮しました。

大本山永平寺は、初めての参拝であった。歴史の重みを感じさせる荘厳さ、溪声山色豊かな幽邃の境に七堂伽藍を中心とした大小七〇余棟の殿堂楼閣が建ち並んでいて禅の仏法が脈々と相承護持され、御開山の説き示された坐禅修行が綿々密々と続けられていることを痛切に感じた。とにかく境内が広い。時間の関係で駆け足でしたが、今度は時間をとってジックリと味わいたい。永平寺は雪深い旭のためか屋根瓦の傷みがひどいため、御志納をさせて頂いたのも参拝記念となりました。

午後は曹洞宗専門道場・大乘寺に一炷参禅でした。古都金沢の郊外にあって加賀藩家老職の本多家と深い関係のお寺であるが、山門に到るまでの墓地には他宗のお墓が見受けられ、比較的自由なお寺かと思われた。ただ外国人の禅僧



大乘寺の山門へ向かう

が案内人であったことには少々驚かされた。日本の禅への関心が高まってきている事を示す一つの事例といえよう。

大乘寺の次は、加賀前田家の菩提寺、天徳院の参拝でしたが、その山門は大変すばらしいものでした。天徳院の次は、能登羽咋の永光寺に参拝した。曹洞宗の太祖と仰ぐ瑩山禪師が開かれた曹洞宗の古刹である。「人の真実の生き方は、すべてのものに対する相対的な分離を離れた平常心が決めるものである。それは、何のこだわりもなく、計らいもなく、お茶を飲み、お食事を頂くように日常生活そのものこそ禅の道にほかならない」と禪師は私達に教えておられ

ます。ここには築造された霊場「五老峯」があります。そして「出家、諸門弟等、一味同心にて当山をもつて一大事となし、ひとえに五老峯を崇敬せよ」と教えており、瑩山禪師が遷化された所でもあります。

二日目の宿泊は「いこいの村能登半島」でした。朝早く起床したためか少々疲労気味でしたが、ホテルの広々とした風呂に入ったらその疲れも一週にふっ飛んだ。その後の夕食、宴会、二次会と大変楽しい場をもつことができた。

最終日は奥能登にある全国二万余の末寺を配する大本山總持寺に参禅した。広大な境内を巡れば古色蒼然とした山水や樹影の情趣に心が洗われる思いが致しました。現代人が忘れかけている日本の心が、ここにあるようです。悠久の時空の流れの中でその美しさは更に磨かれている。伝燈院（開祖、瑩山禪師の御霊を祀つてある）法堂（大祖堂、正面に開祖瑩山禪師、左右に道元禪師、二祖峨山禪師を祀っている）、慈雲閣（観音堂）、僧堂、仏殿、山門のすばらしさは感嘆の一語に尽きます。

最後の参拝は富山県高岡市の有名な瑞龍寺です。「伽藍の瑞龍寺」とまで言われる古刹で、テレビで

時々放映されていますが、現物を拝見するのは初めてです。国宝に指定されるだけの禅宗寺院建築でした。

今回の北陸路の旅は、短い期間でしたが、内容の大変濃い仏道修行の旅でした。私にとりましては全て初めての寺院でしたので本当に有難い三日間でした。最後に、この企画を立てていただいた椎名御老師、小畑代表幹事、五十嵐・安本両年番幹事に心からお礼を申しあげます。

ひと夜限りの雲水

埼玉県大井町 石田 七重

清滝の溪流に添ひ登りゆきたどりつきたる宝慶禪寺
清寂な深山に建つ宝慶寺古淡な総門神妙にくぐる
半夏とふ葉草生ふる北陸の山路を古刹めざして歩む
参禅者を慈悲の心で出迎へし雲水の一人はアメリカ女性
法堂の窓より眼に入るものは雨後の清しき青き山壁
僧堂は人語無くして終始せり替はりて流水さはやかに響く
坐禅する宝慶禪寺の僧堂に絶えず聞こゆる溪流の音
深山より落ちくる水の音響く宝慶

禅寺の書院の窓に書院より望む裏山に立ちませる衆生見守る寂円観音
明け七つ身仕度済みて足洗い曉天坐禅の準備整ふ
おやみなく溪流の響聞こへるて我が血脈のリズムと重なる
開山の寂円禪師は祖国捨て道元禪師に生涯捧ぐ
永平寺と深き緑のこの寺にひと夜限りの雲水となる
老杉の並木と青き山々に覆はれ優雅な楼門あふく
溪流のひびきとひた降る雨の音心洗はる鷹福の山
禅寺の老杉木立に雨しきりひんやりけむる越前の山
人里まで十キロあるとふ禅寺の雲水は今日も托鉢に出る
越前の奥山に建つ宝慶寺半年は雪に埋もると言ふ
しとど降る雨に打たれて下山しつづ振り返り仰ぐ鷹福の山
能登路ゆけばいつしか晴れて海上に浮かぶが如し立山連峰
森閑と寂びた佇ひの大乗寺この修行寺にて一炷坐る
雷と激しき雨音ひびく中こころむなしくひたすら坐る
開創の道元禪師の法燈は七百余年経て今日も明るし
躡着たる老杉囲む霊山の永平寺に

護らる禅の仏法
警策を持ちて緩かに歩みある英国生まれの若き雲水
霊山に脈々と湧く白山水澄みし味はひに心身淨まる



景勝地・能登金剛でひと休み

さわやかな旅

柏市 加藤 孝

今回の旅は、私の旅歴の中でも最も意義があり、印象に残るものであった。

御老師、小畑さん、安本さん、五十嵐さんの献身的な御尽力により実現された旅であり、誠にさわやかであった。ありがとうございました。

二泊三日に渡って巡拝した寺々

〈第二回〉

在家得度式

一月三日、龍泉院で参禅会発足三〇周年記念行事として、第二回在家得度式が行われました。

在家得度式は、在家一般の人が出家に準ずる修行者となるための儀式です。釈尊から代々伝えられてきた教えを自己の全身心でもって授かり、その証しとして、絡子、法名、血脈を受け、今後は仏弟子としての深い縁を生涯に生かして精進努力することを誓います。併せて今後守るべき十六条戒についての話を聴聞し、信仰を堅固にすることを趣旨とします。

得度式は

- 午前九時 法弟受け付け
- 一〇時 開会式
- 一〇時四五分 得度式
- 一一時四五分 記念撮影
- 一二時 点心
- 午後一時 説戒
- 二時二〇分 閉会式
- 三時 茶話会
- 四時 解散

の式次第によって厳肅かつ晴れやかに執り行われました。

参加者は初めて得度を受けられる方二一名、再得度者九名の合わせて三〇名。一〇年前に行われた

新たな精進の

第一歩を誓う

初めての得度式でも二一名が得度され、不思議な数の一致となりました。前回、得度を受けられず一〇年を経て初めて得度された方にとつては、さぞかし感慨深いものがあったことでしょう。

説戒は松戸市廣徳寺の石川宏学老師が「戒」についてのお話をされました。多くの例を挙げて分かりやすくご説明いただき、心に深く残ったことと思います。

茶話会では、新しい絡子を掛けられたお一人お一人の深い思いが語られ、縁によってこの場にいる幸せを実感させるものでした。

得度式に際しては、椎名老師をはじめ、ご随喜の僧の皆様にご大変お世話になりました。また、お祝い、添菜を多くの方々から頂戴いたしました。有り難うございました。最後に企画から準備までご尽力いただきました小畑代表、五十嵐、安本両幹事には心よりお礼を申し上げます。

堂頭祝辞

仏様の御子なることを

自覚し、精進を

お祝いのご挨拶を申し上げます。



本日当山二回目の在家得度式におきまして、新しい方、二回目の方合わせて三〇名の方が得度され、ここにお釈迦様のお弟子様三〇名が誕生されたわけでございます。戒を受けるといふのは、出家僧侶も、一般の在家の方にしても、同じことです。三帰、三聚浄戒、十重禁戒、この十六条の禁戒は、お坊さんも同じです。どこが違うのかというと、ただ資格の違いなのです。皆様方は出家とほとんど変わらない。仏様の御子であるという自覚で、従来にましてご精進をさせていただければと思います。

大乘仏教でいう、ただ諸行無常を自覚するといつても、現実にはどうしたらいいかと思われれるでしょうが、例えばご自分でできること、何がこれから出来るだろうかとか考え、誓えばいいわけです。たとえば、「有す」ということ。これは大きな心で包み込むということですね。加藤周一さんが「ソムリエの妻」という文を書いてま

す。アメリカ同時テロの目標になったビル、一〇階のレストランで働いていたソムリエの若い奥さんのことです。その奥さんは、自分の夫はテロリストに報復とか、仕返しなんて事は全く考えていないはず、むしろ、そういう人と話し合いたい、これが夫と自分の考え方。叩きあいをしていたら、いつまでもエスカレートするばかり。そうではなく、私たちを憎む人々と共通の理解に達しなければならぬのです、と奥さんは言った。

加藤周一さんは、アメリカの名譽はその若い奥さんによって保たれた、また、強いものはいかにそれを使わないか、それが本当の力だと言っていました。いかにも同感です。

いざ我々自身自身の身に振り返って見たとき、常に腹を立て、人を恨み、傷つけることばかりしております。これを宥すという、仏教のすべてを包み込んでいくという豊かな心を私達は共有しています。それを個人関係、仕事においても、家庭においてもお互いに心していかなれないかなと考えております。

皆さん。「有す」という事。これを今日から守っていこうではありませんか。

(口述要旨)

説戒

松戸市廣徳寺住職 石川宏学老師(口述)

皆様こんにちは。本日は誠にありがとうございます。これからは、本日は誠にありがとうございます。皆様は正式に

本日は得度式がありまして、皆様は正式に
仏教徒、仏弟子としてのお立場になります。
お釈迦様からの代々の教えを正しくお伝えく
ださいましたこちらの方丈様のお弟子様にな
り、仏弟子になられたわけです。

仏弟子といってもいろいろな方がいらつし
ます。仏弟子に男女の差、出家、在家の
違いなどないと思えますし、この話は在家の
方には聞かせないという分け隔てや壁は本来
あつてはならないものと思つています。

本心に正しいことならば、男女の差はあり
ませんし、お坊さん、在家の方だろうが通じ
る話でなければならぬと思つています。国
籍や時代を超えて、正しいことは正しく通じ
なければ、これが真実の話にならないと思
っています。ですから今日の話はお寺の和尚さ
んにだけでなく、どなたにも分かりやすい話
にしようと思つています。

私がこの戒の話をしていただくとき冒頭
にする話があります。それはお釈迦様の時代
の話です。お釈迦様がご出家されて、脛りを
ひらかれ仏陀になりました。そのあとも、い
ろいろな国を回っていくと、お釈迦様のお弟
子になりたいと思う人がたくさんいらつし
やいました。お坊さんになりたい人、在家で
お弟子になりたいという人、二五〇〇年前のイ

ンとも今と同じでありました。その中のお
一人が、お釈迦様のお父さん、お釈迦様のお父
様は、カカク、小さな部族の王様でした
が、その部族もお釈迦様のお弟子になりたい
と考えました。それからお釈迦様のいとこ達
も弟子になりたいと考えていたところへ、ち
ようどお釈迦様が説法でいらつしやった時が
あります。王様も王族の人たちも我こそはと
お釈迦様のもとに行こうと思ひました。その
とき一緒についていったのが王様の髪の毛を
散髪する床屋さんでした。王様ですから、身
の周りにお医者さんをはじめ、たくさんの方
使いがいました。王様の髪を刈る召使いはウ
パーリといひました。そのウパーリに荷物を
持たせて一緒に城を出ていった。

やがて、お釈迦様のそばにきたときに、王
様や王子様は自分の身につけていた冠や首飾
り、貴金属や装飾品を全部ウパーリにあげて
しまった。着ているものもあげました。これ
から坊さんになるのだからもうこういう物は
必要ない。おまえにこれをあげるから、これ
を持つて一生楽に暮らさなさい、と渡された。
そして王様たちはみんなお釈迦様のもとへ行
つてしまった。ウパーリは最初すごく喜びま
した。が、しばらくたつてから、これを私に
くれてお釈迦様の弟子になるというのは、宝
石などよりもっといいのだから、とウパー
リは考えた。宝石よりもっといいものなら私
もお弟子になりたいと思つて、もらつたもの
をまた外の人にあげてしまい、王様たちの跡
を追つた。たくさんのお弟子になりたい人が
集まつていました。そのあとお釈迦様に順番

にひたりずつ呼ばれてお弟子になる儀式をし
ていくわけです。

呼ばれる順番を皆気にしてました。とい
うのは一人でも先にお弟子さんになれば、そ
の人が兄弟子、先輩になり、その人を敬わな
ければならない。いったい誰が先に呼ばれる
のだから、王様か、それとも王子様か。やが
てお釈迦様が順番を呼ぶ段になり、あたりが
シーンとした。お釈迦様が口を開いた。「ウパ
ーリ」と。最初だれも信じられなかった。ウ
パーリ本人も信じられない。また、「ウパー
リ」という声がしました。なぜ召使の私が一
番なのだろうか、とウパーリは思つた。「ウパ
ーリよ、お前を一番先に弟子にする」そうし
てウパーリが最初に得度をする。それから順
番に得度していくのですが、そのあとに得度
していく人は王様や王子様。王様は得度する
ときにまずお釈迦様に三拝します。そして、
先に得度した兄弟子のウパーリにも三拝する
んです。今まで召使として使つていたウパー
リに五体投地の最高の礼で三拝をします。そ
の時にお釈迦様がこうおっしゃつた。「父の心
からおごりの心が消えていく」と。私の方が
上だとか、偉いだとか、お前は私の召使いだ
と人を見下していた心が消えていく、とお釈
迦様がおっしゃつた。

親孝行にはいろいろな方法があります。お
いしいものを食べてもらう、いい所へ連れて
行くとか、いろいろな形がありますが、お釈
迦様がなさつた親孝行は自分のお父さんに本
当の心に目覚めて欲しいという親孝行だつた
のであります。おごりの心が消えていくとい



うことなのです。得度というのはそういうこととです。自分の方が上だとか偉いという心を持っていたのでは、仏弟子にならない。仏教の言葉でいうと増長慢といいますが、人のことを羨ましがったり、自分を偉いと思うのも同じです。自分さえ良ければという心が消えていくことなんです。これが得度の第一歩です。それから、お釈迦様の在世のときは、一番初めには決まり事というのがありませんでした。戒めは最初はなかった。今伝統的な原始仏教の世界では、男のお坊さんでこれはやってはいけないという戒が二五〇戒あります。女性ももっと多い。初めはなかったのがなぜ二五〇戒になったかというと、一つのことをして、それが自分や他人を損なうことがあったなら、それはしてはいけないと作っていった。考えようによっては、二五〇という戒は、

一つひとつ今までお坊さんが犯した罪の歴史なんです。判例集みたいなものです。今日、方丈様から授かった戒は二五〇戒とは申しません。十六の仏祖正伝菩薩戒、短くいうと禪戒を授かったのです。

皆様は沢木興道老師という禪僧の名を聞いたことがあると思います。沢木興道老師は明治、大正、昭和と活躍された方ですが、大正三年の時にある寺の結制という式に参加された時の逸話が残っています。結制というのはお坊さんが集まって百日間の修行をするというのですが、その時の指導をされる方は、丘宗潭という方でした。修行に厳しい方で修行僧はみんな怖がっていましたので、前に出て話をする方はいませんでした。ある時、元気のいい修行者が丘宗潭老師に質問に行ったら、質問は禪では独參といえます。当時、沢木老師は丘老師のそばで侍者をされていました。

若い修行者はこう切り出しました。「お聞きしたいことがあります」丘老師が「なんじや」と睨みつけます。修行者「一大事についてお聴きたい」。一大事とは、禪の世界では一番の根本についています。言葉を使い換えると、戒とは何ですか、あるいは禪とは何ですか、悟りとは何ですかという質問なんです。丘老師はなんと答えたと思いますか。「誰の一大事だ」とお聞きしたのです。若者は「私の一大事です」。そうすると丘老師は「お前一人の一大事なんかどうでもいいじゃないか」といって、ふっふっふと笑われた。それを隣の部屋で聞いていた沢木老師は恐ろしきで震え

上がった、という逸話です。皆さんはこのお話を聞いて、どういう感想をもちますか。私は自分が修行僧だったら何と答えるかずっと考えています。

お釈迦様が悟りを開かれた時の言葉が残っています。インドの菩提樹の下で「大地有性同時成道す」という言葉を残されています。この世の中のものが一緒に悟った、という意味です。普通考えますと、お釈迦様一人が悟ったということですが、でもお釈迦様は、私が悟ったとは言っていない。大地有情のものすべてのものが一緒に悟ったということなのです。お釈迦様が悟られたのはご自分ではないのです。世の中の一切、ありのままの様子に気がつかれたということです。ご自分のことはひとつも言っていない。ということとは、さきほどの丘老師と修行僧の問答をみると、解答はありませんが、自分自身ではこう考えています。一大事についてお聞きしたい、戒とは何ですかとお聞きしたい。丘老師は一体誰の戒だ、と応えています。一体誰の戒ですか、というのが既にそれが答えです。戒にあなただけの戒があるのですかという意味です。あなたひとりだけが守ればいい戒というのがあるのですか。あなたと他人をどうして分けるのですか。一切のものがひとつにつながっているなかで、あなた自身だけで成り立っているんですか、という意味だと思えます。それを気がつかずに一体誰の一大事だとい聞かれたとき、私の一大事ですと答えてしまった。質問を返された時に既に大きな意味があるのです。それに気がつかずにいるから、丘老師

がおまえひとりの大事なことでもい
じやないか。こゝにこゝにさうだす

今珍話したことに、禪堂の戒受されたこゝ
うことは、そなたのこゝの四問題ではあり
ません。皆つながらる。私さえ良ければ
いい。私だけ安心すればいいという得度では
ありません。

得度式のなかで、血脈授与というのがあり
ますね。これは正しく法が伝わった、正しく
戒が伝わったという証明であります。その前
に誓持戒という言葉がありまして、戒師の能
く保つやに対して、能く保つと皆さんお答え
になりましたね。この保つという字は正式に
は持という字を当てています。持つという字
です。血脈授与は戒がさすかつた証拠ですが、
皆様は能くたもつやいなや、能くたもつとお
答えになつていますが、もしここで戒を受け
るんでしたら、よく受けるなんです。持つと
いうのは既に持っているということなんです。既
に戒を保持していることです。それではいつ
から持っているのでしょうか。

禪の祖師がたの言葉には意外な言葉がたく
さんあります。戒とか法（教え）は伝えたり
受けたりするものではない、人からもらった
り、誰かにあげたりするものではない、と説
かれていきます。日本ではそれが通用するが、
アメリカでは通用しないというのではない。
仏戒、仏祖正伝の戒というのはいもう仏教徒だ
けに通用する戒ではありません。時代によつ
て限定されるものでもありません。いつでも、
どこでもある戒なんです。得度式は既にもつ
ている戒に目覚めるということなんです。

今日はコップをふたつを用意しました。目
に見える形で具体的に説明しましょう。昔か
ら法を伝える、あるいは戒を伝える方法のひ
とつに、いろいろなたとえで表現されてきた。
これはお釈迦様の時代からそうでした。

戒の伝わり方を皆様にお見せしたいと思ひ
ます。禪宗でよく言われる言葉ですが、一器
の水を一器の器に。コップの水を空のコップ
にすべて移すようにきちんと伝える。水の入
つた方が方丈様だとします。水が戒だとしま
す。もう一方が戒を受ける方。得度するとい
うのは戒を伝えることです。こちらの水
を空のコップに一滴も漏らさず移し伝えたら、
皆様に方丈様の戒が伝わったということす
が、それでは方丈様が空になつてしまいます。
ということは皆様が誰かに戒を伝えたら、皆
様が空っぽになつてしまいます。戒はこのよ
うな水のようなものではない。形があつたり、
思想や知識や信条や経験だとしたら、移して
もこちらが無くなるわけじゃない。



では別のた
とえ方をしま
しょう。今度
はもうそくて
説明します。
こちらが方丈
様。戒がこの
ろうそくの火
だとします。
火のついてい
ない方が皆さ
ん。得度を受

ける人に戒を伝えます。こうして火を移しま
す。火が伝わりましたけれど、まったく同じ
ものが伝わってこの火は増えも減りもしてい
ません。こちらのほうが分かりやすいたとえ
かもしれません。でも、これで終わりではあ
りません。この二本の火のついたろうそくの
状態はいつたいう状態なのでしよう。
火がつくのはいつのことなのか、戒を受ける
前は火のついていない状態だったのでし
ようか。

もともと、二本とも火のついていない同じ
状態だったので。自分に戒を授けてくださ
った戒師様と同じなのだ。ここで分かる。火
をつける前と火をつけた後という区別が一切
ない。これが戒の姿です。

皆様方が戒を受けられるときに懺悔をされ
ました。それから帰依三宝、三聚浄戒、十重
禁戒となつていますが、ひとつひとつ説明す
るには時間がたりません。これをひとつのた
とえとしてお話しします。たとえば、南無帰依
仏の仏はなんですか、とよく聞かれます。伝
統的な今までの教えでは、仏はお釈迦様、あ
るいはお寺におまつりされているご本尊様と
いいました。それでは法は何ですか。教えと
いう答えがあります。では教えはお経の本で
すか、ではお経に書かれている根本は何です
か。よく言われるのは宇宙の真理です。仏は
宇宙の真理に目覚めし人（覚者）とたとえら
れる。みな言葉の説明なのです。では最後に
宇宙の真理とは何ですかとなれば、どうなる
んでしよか。宇宙の真理を授かったのでし
よか。

道元様のお話をさせていただきますが、道元様が悟りをひらかれた因縁というのを後の人が伝記にまとめられています。中国は宋の時代、寺で坐禪を組んでいた時、隣の坊さんがいつも居眠りをしていた。道元さまのお師匠様になる如浄禪師が隣の坊さんを警策でたたいた。刻々と移り変わっていく時の中になぜ居眠りなんかするんだ、といって打った。その時に道元様はハッと気がついて、後に如浄禪師のもとへ行って焼香した。如浄禪師が、お前はなぜ焼香するのだ、と尋ねた。道元様は、身心脱落し来る、と申しました。それが道元禪師さまの悟りの様子だった。そこで証明をされたと記述があります。

この話をすると、大人の方はああそうかと申しますが、同じ話を小学生にしたことがあります。小学校三年生です。子供でもわかるように話をする必要がありますね。一番問題なのは、身心脱落です。身と心が抜け落ちることです。小学生に、道元様は体も心もすっかり落ちました、といったんです。したら小学生「おしようさん、体と心が落ちたってことは、あと何が残るんですか」と。

たとえば、財布を落としたら、落とす本人がいる。体と心を落としたり落とす主があるんでしょか。もしあるとしたら、落とす主とは何者でしょう。結局、道元様がいわれるのは、もともと落とし主なんかいないのだよ、ということなんです。私達が自分だ自分だと思っているのは、体と心の働きだけです。ですから、戒というのは守る、守らなくてはいけない、守りたいという気持ちは全部二五〇戒の

考え方です。正伝の仏法の戒では、戒は犯しようが無い。私達の身と体の動きそのままの姿です。それを消しようがないということです。

いろいろな戒のなかで何が難しいかということ、いろんな考え方をします。たとえば不殺生戒。戒を受けたとたんにもうこれは守れないという方がいます。たとえば、動物の肉を食べないで生きていくことはできるかもしれない。けれども、野菜は食べる、果物は食べる、魚は食べる、もちろん水は飲む。殺してはいけないということ、戒を受けた瞬間に守れないとおっしゃる方がいますが、そういうことではないのです。殺しようが無いということなんです。私達の身も心もそれぞれの働きは、もうやったということももう変えようが無いのだ、という意味なのです。ですからこれから生きていくのに、すこしでも命を無駄にせず、命を生かしていくように私達はできるのです。

お酒のことでもそうです。お酒にたとえているのです。現実のお酒が私達の行動にいろいろな迷いを生じさせることが多いから注意しなさい。私達の迷いは現実のお酒だけではありません。言葉もそうです。騙されることもあります。それから間違った教えに酔い、迷ってしまう。そのために人を傷つけることもあります。私達の心を迷わせてくたさい。私達の心を明らかにして命を活き活きさせるならば、それは良いお酒だと思ってください。

日本の仏教徒に一番お話しにくいのは、

第三不貪淫戒というのがあります。修証義の中では不邪淫戒という言葉でつかわれています。お釈迦様の時代は男女の交わりは一切禁じられていました。お坊さんの結婚は禁じられていました。現代でもそれを守る上座部仏教もあります。ですから、日本の結婚している坊さんは仏教の本当の坊さんではないといわれています。すると今の仏教徒はいつたいどうなってしまうのか。私達の問題としてこの話は一番しにくい。

いろいろな説き方がありますが、私も結婚しています。子供がいます。今から十数年前、子供が小学一年生の頃、近所にホームステイしていた外国人がいました。お寺や仏教のことを知りたいというので私は日本の仏教のことをいろいろ説明しました。説明するその時、長男がいつもそばにいました。青年は、この子は誰ですか。私が、私の長男です。すると、日本のお坊さんは結婚していいのか、と聞かれました。はい、と答えました。青年は不思議な仏教ですね、といって帰りました。それから長男が私に聞くのです。お父さん、お坊さんで結婚してはいけないの。もし、私が仏教の歴史から説明して、本当は結婚してはいけないのだと説明したなら、長男は、「ああ、そう。じゃあ本当は、僕は生まれてきてはいけなかったんだね」といいます。ですから何が本当の仏教かということ、歴史上のこともありますし、概に言えませんが、私は結婚するのが間違った仏教で、結婚しないのが正しい仏教という二つに分ける考えはありません。結婚しても、しなくとも誤ることはある。



「戒」を分かりやすく、かみくだいて

今の生活の中で出来るだけ正しくお釈迦様の教えに従って生きていこう、それがごまごま結婚しているお寺で生きていこう、生きていかなければいけない、と思っっています。これは日本の仏教では珍しくはありません。

中国の神宗のお話には、こういう逸話が残されています。私教信者のおばあさんと幼い孫娘がいました。そこへ修行僧がここで修行させてくださいといつてきました。おばあさんはどうぞといつて修行僧を約二〇年間、食べ物運んで扶けていました。二〇年もたつて、もうそろそろ大丈夫かと思つて、おばあさんはその修行僧に孫娘を近づけていって、言い寄らせた。若い修行僧が坐禅をして、いるとき、若い女性がきてどうするのかと思つたら、私の身も体も寒い冬の岩壁のようなもので、それに寄りかかる木の枝はなにも感じません、と答え、女性を退けた。おばあさんはその話をきいてなんと答えたか。さすが立派な修行

僧だ、若い女性の誘惑をばねつけてお孫さんだ、というのかと思つたら、おばあさんは二〇年間も養つてしまつた。お孫さんが修行僧を追い出し、火をつけてお孫さんごとくした。たつたそれだけだからどうなのかいふのは何も無い。皆さんで考えてください。

話は換えてしまつたといふところで終わっている。その話が中国、日本と千年以上伝わっているんです。もし修行僧が若い女性を受け入れてしまつたなら、この話は伝わらないと思います。また、おばあさんが修行僧の態度を誉め称えていたらこの話は伝わらない。これが禪の公案として残っている。いろんな解釈ができる。修行僧は一体どんな態度に出れば良かったのだろうか。どれが正解なのだろうか。私が思うことは、戒を受けたということは何か付け足すことじゃない。それから自分の心を変えることでもありません。新しい考えに入れ替えることではありません。そうならばこれは洗脳と同じです。ほんとうの今の自分の様子に目覚めることです。自分が迷っているなら迷っている様子、喜んでいながら喜んでる様子、腹を立てるなら腹を立てているのが様子なんです。腹を立てていることと笑っていることと一度にないのでから。それが自分の様子です。

それから、三宝印という言葉があります。そのひとつに諸行無常、ということばがあります。すべてのものが移り変わる。全てのもので移り変わるというのは、人からもうもすよと言われているから、本当だ諸行無常だと

るんでしようか。言われる前から諸行無常なんです。このお寺を一步で家に帰れば、諸行無常ではないか。この寺を一步でも諸行無常なんです。ここでも諸行無常なんです。

時代とも関係ありません。いつでも、どこでも諸行無常なんです。諸行無常は国や宗教と関係ありません。自分というものの中心は何も無い。これが自分です。身も心も落ちたところに残るものは何も無い。そして涅槃寂靜の世界。これは人からもらつたり、あげたり、時代によつて変わつたり地域によつて変わることであります。皆様の今の姿が全部三宝印なのです。ですから今日戒を授かつたといふことは自分自身が諸行無常だ、諸法無我、涅槃寂靜だということに気がつくことです。もともと私達は諸法無我なのです。じゃあ、どうやって生きていくか。ここから全部始まるということでもあります。

何度也得度式を受けられた方もいると思います。コップの水だつたら、何杯もつがれたら溢れます。戒は固定的なものではありません。諸行無常を確認するというのは、一遍だけでもいいし、何回受けても諸行無常が増えたり減つたりするものではありません。いっさい増えも減りもしません。それが諸行無常であります。もともと諸行無常なところに諸行無常を確認されたのです。今日、方丈様の一つ一つのお言葉によつて、能く持つや否やということばは、私自身が諸行無常をよく自覚しますということ。今日は仏祖正伝菩薩戒のお話について申し上げました。ご静聴ありがとうございました。

あの一言

四街道市 大坂 昌宏

「行きましょう！」

あの一言がなかったら、今日の得度式は私にはなかったと思います。石川御老師との出逢いもなかったことでしょう。また、椎名御老師と感激の握手もありえませんでした。

五年前の八月末、私は飲酒運転による事故を起こして、家族や関係者に大変な迷惑をおかけ致しました。翌九月の参禅会の当日は、台風の影響で風雨も激しく誰もが外出を躊躇う天候でした。自己嫌悪とやましい気持ちで、私も直前まで出席を躊躇っておりました。

その時、「行きましょう！ 私と一緒にいきます」妻が毅然とした口調で私を促してくれました。私はその一言で救われました。後日、恥を偲んで『明珠』にすべてを悔ませて頂きました。椎名御老師から、これこそ懺悔ですとのお言葉を頂き、今でも目頭が熱くなったことを覚えております。

皆様のおかげで今日の晴れの在家得度式を迎えさせて頂き、至上の悦びに浸っております。法名、給子授与、血脈授与と厳かに式が進み、午後の石川御老師の説教が

始まりますと、感謝と緊張で昂ぶる心を抑えきれませんでした。

続いて閉会式も滞りなく終了し、全員感謝の内に退場致しました。

次の茶話会まで少々の間がありましたので、大悲殿にて待機しておりました。すると、突然私の名を呼ばれました。説教を頂いた石川御老師がお呼びとの事です。

「瞬間、えっ？と訳がわからず驚きました。何か非礼なことでもしてしまったのだろうか、と恐る恐る案内された部屋へ妻と共にまいりました。

「茨城県の黒田さんを御存知ですか」

石川御老師のこの問いかけて私の疑問は解けました。黒田さんは日頃、公私ともにお世話になっていらっしゃる方です。実家が東町にあり、農業を営んでおられます。生前のご尊父の時から現在のご実兄にまで大変お世話になっております。

ある時、黒田家の法事の席で住職さんと「坐禅」が話題になりました。偶然にも私の名前が飛び出したそうなんです。住職さんは『明珠』に投稿した私の記事を読まれて、私の名を知っていたそうです。この時のご住職さんが、今、目前に居られる石川御老師でした。「人はご自分の恥すべき行為をな



絡子を授かる大坂さん

かなか公に出来るものではありません」

「得度を受けられるのは今日が初めてですか」

「では、これを機会にますますご精進なさって下さい」

身に余る有難いお言葉を頂き、恥じらいながら退室致しました。わざわざお呼び頂き、今日の出逢いは忘れ得ぬ縁となる事と感謝致しております。

今日は得度式、そのご縁に依る石川御老師との出逢いと感激の渦でした。

しかし、この感激はまだ終わりではなかったのです。さらに劇的といましようか、奇跡とも思える事実を椎名御老師から知らされました。

「大坂さん！同じなんですよ！」御老師から両手を添えて熱い握手を求められました。御老師ご夫

妻と私たち夫婦のそれぞれの誕生日が全く同じだったのです。法名ご説明の時、ありがたい法名に囚われていて、御老師と私だけが同年齢とのみ思っておりました。あらためて、不謹慎をお詫び致します。

「違いますよ！あなたと全く同じなんですよ！家内は届けが遅れて戸籍上は違いますが、実際はあなたの奥さんと全く同じなんですよ！」

「そうですか！勿体無いことです。法名も御老師と同じ文字を二つも頂き、本当に有難うございます」

なんとという奇遇、畏れ多いことと一瞬言葉を失いました。今日という日は私たち夫婦にとつて正しく仏のお導きと感謝致しております。

これを機に、仏の御教えを信じ、仏の徳を身に具えるため、さらなる精進めざして歩み続けます。

今日の在家得度式を感謝、感激をもって受けさせて頂きました、椎名御老師様

石川御老師様

参禅会幹事の皆様にご心より御礼申し上げます。今後とも益々のご指導・鞭撻を、どうぞ宜しくお願い致します。

終わりに大変厚かましい事ですが

が、一言お許し下さい。あの時、私を支えてくれた妻に、「あの一言を、ありがとう！」

平成十三年一月三日 南無

身に余る得度式

四街道市 大坂 晶子

この度は、身に余る在家得度を受けさせていただき有難うございました。

初めてお聞きしました時は、かなり戸惑いました。弁解するのもお恥ずかしいことですが、仏の道については、日頃から不勉強もはなはだしく、参禅会の時だけの学習でした。

般若心経も暗誦できず、坐ることも満足に出来ない私です。こんな私が、と気後れ致しております。通勤の往き帰り、仕事の合間を見つけては、夫とも話し合い、参禅会先輩がたのお話も聞きました。私なりに、お釈迦様を信じ、その教えを身につけて生きるつもりなら、ここで弾みをつけようと決心させて頂きました。

厳かな式に出席して身に余る法名を頂き、あらためて感動し、法弟となる責任の重さを感じさせられました。

また、夫と一緒に石川御老師さまにお会い出来ました事、大変嬉しくありがたく思っております。さらに驚き感激させられましたのは、推名御老師二夫妻とのお誕生日の一致です。これもまた身に余る事といわざるを得ません。有難いご縁と感謝いたしております。

推名御老師から拝受いたしました「禪の十戒」を熟読し、法弟としての身を能く保つよう努力したいと思えます。どうぞ今後とも厳しいご指導、心よりお願い申し上げます。

私たちが仕事で家をでる時は、空には星もまだ輝いて見える時刻なのです。これからは、あの夜空の星たちのように、いつでも清らかな澄んだ心でいられますよう精進したいと思います。

推名御老師様
石川御老師様

また参禅会幹事の皆様、本当に有難うございました。

平成十三年一月三日 南無

米国のテロと得度式

流山市 中島 宏誠

今回の得度式は名前だけ参加させて頂くつもりでした。その訳は、

ハワイオアフ島で行われる結婚式に妻と参列するため。一月二日、六日まで不在の予定でした。ところが今回米国で起きた同時テロのため、オアフ島の挙式がなくなり、得度式に出席することが出来ました。

一〇年前の得度は、どうお受けすればよいか迷っていましたが、身を清潔にし、全て新しい下着を身につけ、式服で出席したことを思い出しました。

今回得度式を迎える私は、九月の参禅会「口宣」で推名老師が説かれた道元禪師が最後に示された「正法眼蔵・八大人覺」の「遺教」を理解するため、神田の古本屋で定価の約四倍で求めた、上田祖峯老師、元駒沢学園・学園長が書かれた「新訳・遺教経」を讀ませて頂いているところです。

私の法名は「至道宏誠」ですが、道号「至道」は、愚堂國師の教えに接し、五〇才を過ぎて出家された「至道無難禪師」の号を頂戴し、身に余る光榮と感謝しております。法諱「宏誠」は推名老師に自己申告をして戴いた名前です。

昭和四四年に長女が誕生し、命名する際に、私も改名をして「宏誠」としました。それ以後は会社人事部も了承され、名刺は宏誠の

下に小さく「」書きで南洲男を入れ使っていました。自宅の表札、郵便等も同様です。

法名に「宏誠」を戴いてからは、「名・心・身」が「ひとつ」になつたような気がします。 稽首

法名「無根宝樹大姉」賜る

埼玉県大井町 石田 七重

厳かな得度の式に参列し老師に賜はりし無根宝樹の名

いよいよこの日が来ました。在家得度を受けるとのこと、一体私に資格があるのか、しばらく考えました。結局どんな資格、覚悟云々より、片道八〇キロの道のり、少し遠方ながら龍泉院ならではの坐禅、ご提唱に吸い寄せられるような思いで通わせて頂いている、という事実のご縁、三〇周年という大きな大きな節目に居合わせたご縁を頼りに、決心しました。そしてこれを機に僅かずながら仏法という教えを日々の根底に据えられるよう、身近な所から精進してゆきたいと思えます。

さて、私の授かりました法名、無根宝樹についてですが、辞書を繙きますと、「無根」本当だという証拠が全く無いこと。根が無い。

よりどころがない、「宝樹」は七重宝樹の略、七つもしくはたくさん真重な樹という事になります。

「無根」という字を拝見した時、ビックリ私だと思いました。四〇才も過ぎた頃から、今までに感じた事の無い、ころもとなさが付き纏うようになりました。私は一才で父を亡くし、全く父という存在を知らないという心もとなさです。それは自分に根拠が無い、元が無い。もちろん母、三人の兄、四人の姉達から溢れるほどの愛情を注がれ育ちました。父の倍ほども長生をした母の他界後、様々な法要に集う兄、姉達の楽しげに語り合う、父という人の広く明るく豊かな個性、その父との交流の話、そんな時私は(寄り掛る母も亡く)一人参加出来ず、皆がこんなに知っていて慕っている父を私は全く知らない。このことが私にとっては大変こころもとないのです。

どんな人だったのかしら、私にどんな話を話したのかしら、こんな事を話し掛けたのかしら、こんな思いを、主人と子供達の交流を見ると、しかし私は父を知らない：と今も引きずっています。

椎名老師のご心眼にこんな私の心もとなさが映し出されたと思えました。茶話会でのご説明で「無根」は「お悟り」であると話されまし



左より大坂さん、加藤さん、石田さん

た。素直にお言葉のまま心にしました。授かりました法名と血脈を、今日よりは私のよりどころと致します。精進を重ね、積んで七重宝樹の根を張らせ、幹を豊かにせよとのお示しと胸を熱く致しました。誠に有難うございました。

【明珠三三四号の従容録に字ぶ(三〇)の解説の如く、万法そのものを素直に見聞きできての安らかさを夢みて、常に道心を発す努力をいたしたく思っています。合掌

勝縁を得て

沼南町 永野 昭治

このたび、椎名老師の慈厳溢れるご配慮に依り、在家得度いたしました。真に有難く心から感謝申

し上げます。

顧りみまずと、参禅会に入会をゆるされてから、二年数ヶ月が経過いたしました。その間に、数限りない教えを戴きましたが、大方は解ったような解らぬような、誠に心許無く慚愧に堪えません。

戒律を「能く持つ」ということは、「戒に目覚める」ことであると教示されました。悉く仏道を志す者の守るべき心構えは、どのような日常生活をするのが一番良いか、という生活態度に対する教えであると理解しました。なんだか、戒律に背けば、自分自身の向上が妨げられますよ、と暗示しているようです。

どんな境遇にあつても、平静さを失わず、落着いて淡々とした気持で、不平不満を感じない、そんな恬安憺怕な心境でありたいと思えます。只今から、この勝縁を機に、発心新たに、全てを三室にお任せして、戴いた法名、眼睛昭鑑居士を胸中にして、只坐り続けられることを念じております。

法弟代表謝辞

本日は椎名御老師様をはじめ、石川御老師様、大村、酒井、井上各方丈様におかれま

しては、大変お忙しいお時間をお繰り合わせくださいましてご来臨をいただき、かくも厳肅なる得度式を挙行してくださり、我々一同まことに身に余る光栄と存じ、心より厚く御礼申し上げます。

また、堂頭様、参禅会代表の小畑様からも心温まるお祝いの言葉や、励ましのお言葉を賜り、身の震える感動を覚えると同時に、先輩諸氏皆々様のご厚意に深く感激いたしております。

晴れて本日、仏様のお導きにより、めでたく仏弟子としての深いご縁をいただきましたので、今後はなお一層、仏道の実践に邁進すべく、精進努力を積み重ねて参る所存でございます。

今後とも、一層のご指導ご鞭撻くださいますよう、幾重にもお願い申し上げます。法弟代表の謝辞にかえさせていただきます。本日は誠に有難うございました。

平成一三年一月三日

龍泉院参禅会
法弟代表 美川武弘

〈茶話会での談話〉

杉浦上太郎さん（柏市）

昨日、得度式に臨むに当たって床屋へ行ってきました。この際、剃ってしまおうかと思いましたが、会社でびっくりされても困るので五分刈りで手を打ちました。一〇年前は今泉さんと年番幹事をしており、一〇年待って今回ようやく得度させて頂きました。これも節目かと思えます。この日を大切に今後も精進したいと思えます。

清水秀男さん（我孫子市）

素晴らしい法名を有り難うございます。これから仏弟子として気持ち新たに、お手観音さんは千本の手を持っていますが、私はせめて一本でも皆様のお役に立つように、本物の仏教徒になるように精進したいと思います。

今泉章利さん（柏市）

一〇年前はまだだと思っていました。今日ようやく得度させて頂きました。去年の末に母がなくなり、大変なショックで未だに尾をひいています。そんな中このお話があつて、私は素直に今度こそ得度させて頂きたいと申し出ました。ここに集まる方たちの心が素晴らしく、それだけでも私は有り難いと思っています。

今泉房子さん（柏市）

皆様と一緒に得度を受けることができて感謝しています。私は、お釈迦様がお悟りになった一二月八日が誕生日。もう一つ今日、一月三日が第二の誕生日になりました。椎名老師が名づけて親で今日は本当にうれしく思っています。夫と同じようにご縁があったのだと素直に受けようと思えました。それから今日のお話は、宥すというとてもいいお話。私だけでなく皆様と、そして夫まで一緒に聞いていてよかったです。



今泉さん 精進を誓う

大坂昌宏さん（四街道市）

今日の感想を句にしました。身にしむや未得に受けし得度式

大坂晶子さん（四街道市）

得度式を受けるについて迷いがありました。生きていく上で、プレッシャーになるのでは、とずっと頭から離れなかったが、因縁があつたと思ひ得度をうけました。

美川武弘さん（さいたま市）

外国へいくたびに、お前の宗教は何だ、と聞かれますが、そのたびに口ごもってしまいました。今日からは胸を張って仏教徒だといえ、大変うれしく思います。

美川恒子さん（さいたま市）

宥すという言葉が一番心に染みています。つい人を自分の物差しで計ることがあつて、夫に対してもそうでした。苛立つ事もありました。これからは宥すことで精進したいと思えます。

松井 隆さん（沼南町）

五年前、中国旅行からのご縁です。今日、お釈迦様の儀式・得度式に参加させて頂いた感激しております。法名を天山隆道と命名していただきました。天山のような木のない山でも道を切り開くよう生きていけたらと思っています。よろしくお導きください。

石田七重さん（埼玉県大井町）

短歌でひとこと申し上げます。おごそかな得度の式に導かれ老師に賜る無根宝樹の名身の回りに起こること、小さな事柄に、宥すという言葉を中心に分を磨いていこうと思えます。

加藤 孝さん（柏市）

私は生まれた日が八月一五日のお盆ということから仏様にはご縁があるようです。法事などで兄弟

が集まると、私は機会さえあればいつでも出家する、なんてことを三〇代の頃から申していました。また女房にその覚悟をしておけ、と言っていたのですが、どういつか一縁に得度してしまいました。

有難いご縁をいただきました。加藤和子さん（柏市）

主人にひかれて、龍泉院にまいりまして、主人の陰に隠れてきましたのに、得度をさせて頂きました。今日からスタートという気持ちで精進させていただきます。

久光守之さん（流山市）

守道という名をいただきました。考えてみますと、私はどこにも守るものがない。守られていることしかありません。仏様に守られてやっとここまでできたと。五年前参禅会に入りまして、いつのまにか見守られて有難く感じています。

阿部倅士さん（船橋市）

今日、初めてこの会に参加させて頂きました。体が悪いものから、皆様にお手伝い頂きながら無事この得度式を終わらせて頂きました。また方丈様には身に余る法名を頂きまして本当に有難うございました。妻がいろいろお世話になってる事、常々伺っておりまして。今日参りまして、さすが参禅会というのは素晴らしい人達の



新しい絡子をかけてお話を聴く

集まりだな、ということをも身に染みて知りました。

阿部史子さん(船橋市)

主人は日ごろ参っておりませんけれど、得度式を受けられたのも、ご老師様、皆様のおかげで本当にうれしく思っています。五年前、自分の人生がすべて崩れてしまうようなことがありました。それ以来は参禅会にお世話になり、昨年からは参禅会に参加、これもつながっているご縁と思っています。そして花のような美しい心という意味の法名を戴きました。宥すという

全てのものを包み込む軟らかい心を持ち、小さい事でも自分のでき

ることはしていきたいと思えます。

永野昭治さん(沼南町)

立派な法名を頂きました、有り難うございます。以前頂きました修証義を読み直してみまして、私に出来るか危惧いたしておりましたが、石川老師のお話で、己の様子に目覚めることだと聴き、ちょっと安堵しているところです。

三浦輝行さん(我孫子市)

昨年の昨日、大手術をうけてちょうど一歳。退院した頃に、御老師からお手紙を頂戴して、その中にもう一つの道があるんだよ、という言葉がありました。しばらく何だろうと思いついていましたが、どうやら今日分かりました。

二階堂雄一さん(流山市)

参禅会に参加して、まだ二年目で早いかと思つたんですが、法名を頂きました。これから少しでも自分の生活の中に実践していこうと思つています。

今西崇雄さん(松戸市)

参禅会に参加して日が浅いもので迷っていたのですが、締切りぎりぎりになって杉浦さんから背中を押されて得度を受けました。今日は自分を見つめ、宥すというお話を聞き、一歩前に進んでよかったと思います。

伊藤幸一さん(鎌ヶ谷市)

大変立派な有難い法名を頂きまして涙がでるほどうれしく思っています。私の母親の実家が若白毛にあり、菩提寺が今日いらつしゃいました大村老師の長栄寺です。

屋号は幸右衛門といいますが、昨年、跡を継いでいる叔父、祖父が相次いで他界しました。叔父には跡を継ぐ者がいませんので、幸の字を使っている者はわたくし一人しかいません。私は幸の字を大切にしていきたいと思つており、そのうえ親寺である龍泉院様のお名前を法名に戴いてしまいました。

二年半前に車にはねられ死ぬ思いをして仏教に目覚め、まだ参禅会に参加して一年経っていませんが、皆様にご指導とご鞭撻を頂きながら、自分自身を磨いていきたいと思つています。今日は母親の実家によって、墓前でこちらの法名を自慢して帰ります。

相澤善彦さん(鎌ヶ谷市)

仕事で歩いていたら、書店で手に取った本で、龍泉院を知りました。家族は家内と子供三人で、家内は夜学へ通い、皆勉強していて、私以外全員大学生です。在家得度の話があった時は、まだ半年しかたつていませんが、仏様は心の中にあり、新旧は関係がないらしい、というところには、じゃあ行って勉



強したらということ、今日ここにいる次第。法名は良い行いを積みなさいということですが、学生の頃から、土木が専門で、積むというと分かりやすく覚えやすい。今後は会社、家庭、個人と、在家でありながら雲水さんのように生きていけたらと思つています。

~~~~~**編集後記**~~~~~

参禅会発足三〇年。椎名老師は性情を誡めながら仏道の不断の相続を説かれ、期せずして小畑氏にも仏祖の道現成としての坐と相続の尊さを教えられる。石川老師の説戒には幾つもの題目が提起されている。よくよく味読され、日々の精進の糧となることを願う。また、寄稿下った方々、写真や絵のご提供に感謝申し上げます。(武田)